

【エッセイ・回顧】

靖亜神社 始末 (一)

滬友18期準 村上 武

① 上海・東亜同文書院の創建

「この中国の歴史と文化に深い憧憬をもった日本の若者たちが、かつて、はるばると笈を負って玄海を渡り、大陸に学んだ。東亜同文書院とその後身東亜同文書院大学の学生たちである。この学堂は、今を去る八十一年前、二十世紀開幕の年である明治三十四年（一九〇一年）に、長江の河口に注ぐ黄浦江の沿岸上海に創設された。」

これは、昭和五十七年に発行された『東亜同文書院大学史—創立八十周年記念誌一』の「歴史の声—一序にかえて—」に、当時の社団法人滬友会（東亜同文書院同窓会）会長の田中香苗（元毎日新聞社社長）氏が書いている一節である。田中会長はさらに

「明治維新をなし遂げて独立を保持した日本は、西力の東漸によって崩れてゆく隣邦中国の命運に、大きな憂悶を抱いた。中国の興亡は東亜の安危に、日本の盛衰に繋がることを認識し、日中両国の提携によって、中国の保全とその興隆を念願した先覚の志士が輩出した。中国においても、日本の進運と、日露戦争の勝利によってもたらされた東亜の新形勢に刺戟されて、憂国の志士たちが現れた。孫文とその弟子たちである。彼らは日本に学び、日本に助力を求め、これに応じた日本の志士も多かった。

孫文は遂に滅満興漢の革命をなし遂げ、中国大解放のための礎石を敷いた。

中国の保全を希求し、新しい中国の政体を待望し、日中の共存共栄を願望した明治の先覚たちの先達として、近衛霞山公がいた。荒尾東方斎、根津山洲がいた。東亜同文書院はこの三先覚を中心に、教育分野における日中協同の理想を具体化して生まれたものである。その初代院長には、近衛の主旨を体し、荒尾の遺志を継いだ根津が選ばれた。

書院建学の精神と目的は、院長根津が提唱した「大学の道」に学び、日中輯協（友好協力）の基礎を固めるために必要な人材を養成することにあつた。この学園に、年々歳々、靖亜の大志に燃えた若い俊秀たちが、日本全国から集って来たのである。後年には、志を同じくする中国の青年たちも加わり、共に机を並べて勉学するようになった。（後略）」

と続けている。東亜同文書院がどのような理想を思い描いて建学されたか、また当時のアジアの情勢はどのようなものであったか、そこに集う学生たちの意欲が如何なるものであったかは、この田中香苗会長の文章に尽されていると思う。

愛知大学は東亜同文書院大学の衣鉢を継ぐ大学として意欲的な活動を続けている。

愛知大学に学ぶ俊秀には、この東亜同文

書院に学んだ先輩たちの意欲を今に受け継いで、混迷多端の日中関係の現状を、大きくアジアと世界を包み込む「大学の道」によって道筋を立て、リードして貫きたいと願う者である。

そのためには、東亜同文書院、東亜同文書院大学に学んだ先輩たちの姿を知る事が大切である。先輩の姿を学ぶために、愛知大学には「東亜同文書院大学記念センター」がある。そこには、孫文革命を支えた日本人の一人としての父・山田純三郎先生とその他の方々の事績を後世に残そうと願って、幾多の関連資料・遺品などを収拾保存して来た山田順造（38期）さんが残した多くの貴重な資料が保存整理されている。また、京都の山洲庵から東松山市の靖亜神社がお預かりしていた根津先生の遺品の数々も納められている筈である。アジアの歴史のうねりに直接触れる機会に恵まれた愛知大学の学生諸氏は幸運である。大いにこの資料を活用し研究を深め、輪を広げて頂きたい。

だが、これだけでは足りないものがあると私は思う。東亜同文書院はその教科内容から見ると、現地中国上海に居を定めた、語学（中国語）重視の商業高等専門学校の域を出ていないように思われる。しかし、同文書院は単なる商業専門学校ではなかった。その事実は、次の逸話から窺える。

「上海には二人の狂人が居る」と初期の同文書院で語られていたと云う。それは

「清の聖祖康熙大帝（第4代）の徳未だ衰えず、と云って清朝の復辟を唱えて、孫文の革命政府を攻撃した白川西本省三と、孫文の滅満興漢の革命に一族を上げて傾倒協力し、自身の長女（民子さん）をも犠牲者にした山田純三郎である」

とされた。この二人は共に根津山洲先生

の膝下に居た方であった。根津先生の「大学の道」は洋々として大海の如くこの二人をも包含し尽して、微動もする事がなかった。この先覚の精神・「大学の道」を後世に伝えようとしたのが「靖亜神社」であった。

この靖亜神社が同文書院の衣鉢を継ぐと云う愛知大学の建学の理念の深奥に存在しなければならないと思う。

② 靖亜神社の創建

昭和九年四月一日、靖亜神社の創建を発起した、時の東亜同文書院院長大内暢三先生は、「靖亜神社建立趣意書」にこう書いている（その後半）。

* 惟ふに、三大先烈の志す所は夙に靖亜の偉業に在り。至誠以て之が大経を経綸し、之が大本を確立す。是を以て其の経世済民の事に発するや、道義の極則に準し邦国の宏軌に由り、而して所謂天地の化育に賛参する所以にあらざるはなし。然り而して、今や政教内に振ひ国運外に伸ぶと雖も、列強雄を競ひ力を争ひ未だ長治久安の佳象あるを見ず。全亜細亜前途の險難は設想すべきなり。乃ち三大先烈の志業は今仍ほ中道に在り、之れが大成に到りては遠く継起の士に待つ有るなり。

夫れ我が書院は、実に三大先烈の遺意を継承し以て今日の隆運を見るに到れるなり。不肖、本年二月十一日をトシ霞山公三十周年祭典を挙るに際し感慨窮りなく、三大先烈の偉靈髣髴として直ちに此に臨照せられたるの感を深くせり。祭儀肅穆、皆復た追憶の涙に咽び慨然として本院使命の重且つ大なるを覚知せり。

不肖、乏しきを院長の重任を承け、日夜さいれい淬礪、力を菁莪の化育に致し、茲に深く慮る所有り。遍ねく同志の士と胥謀り、地を

院内に相し靖亜三大先烈の神殿を建立し、以て偉霊を不朽に崇祀し、併せて日清貿易研究所並びに本院出身諸士の殉道者を従祀せんとす。凡そ学苑に出入する者は偉霊を拝し盛徳を懐ひ、日々其の観感する所を以て先烈の遺意を光大にし、歳時に誠敬を致し以て招魂の典礼を挙ぐるを得ば、庶幾くば先烈の志業を恢弘するを得べく、報本反始の道亦た自ら全きを得ん。而して此の事たるや嘗に本院盛衰の関する所たるのみならずなり。同志の士願くば微意の存する所を照鑒し、院内一致の精神を達成せらるるあらば至幸洵に之れに尚ふるなきなり。

昭和九年四月一日

发起人 東亜同文書院院長
大内暢三



出典：『東亜同文会事業報告書 昭和十年上半期』

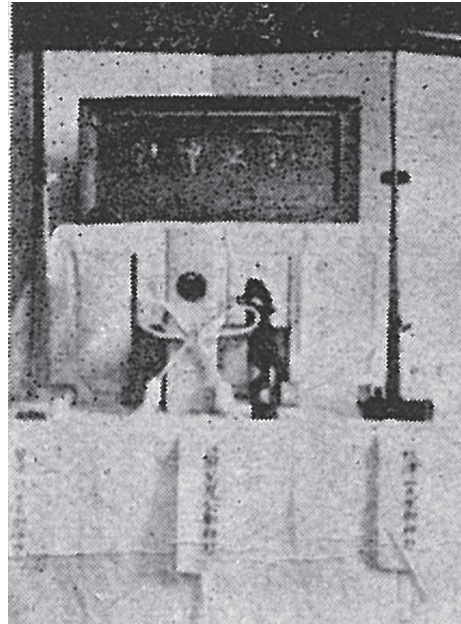
③ 靖亜神社のご神霊

大内暢三先生の「建立趣意書」は、私が昭和六十三年十一月三日の「靖亜神社秋季大祭資料」の記念資料集として作製したパンフレットから引用している。この資料集の原資料は、昭和十年の雑誌『支那』の「靖亜神社創建特集号」から取ったと記憶している。

この東亜同文会発行の雑誌は愛大の同文書院大学記念センターにもある筈なので、貴重な資料であるから、存在・内容に

についても確認をしておいて頂きたい。この雑誌『支那』の35ページに「靖亜神社の御神霊」と題して、次のような記事がある。

「靖亜神社のご神体は近衛篤磨公の「宝刀」、荒尾精先生の「神剣」、根津一先生の「軍刀」の三体であるが、近衛公の宝刀、荒尾先生の神剣は去る十一月六日入港の上海丸で東京牧田理事之を捧持して帰滬（滬は上海の意）し、何れも御神体として靖亜神社に安置されたものであるが、右御神霊刀に関する記録を拝記すれば左の通りである。



出典：『山洲根津一先生並夫人』（1943年）

三、根津先生の軍刀

（中略）

山田委員長謹話

靖亜神社建立の当初より、大内院長に於かせられては種々考慮せられる所がありまして三大先烈の御三家から、永遠に記念と致すべきご家宝を拝受せられたいとのことでありました。右の次第で、今年七月

十日私は桃山に於て、故根津先生の御墓に参拝の後、根津栄子刀自を訪問致しまして、靖巫神社建立に関する其の後の委細の経過を御報告申し上げ、そして何なりと記念と致すべき御家宝を頂戴することが出来ますならば、改めて頂戴に出でたき旨を申し上げました。然る所、刀自よりは根津先生の平生に就きての御話がありました後、当家には只一口の軍刀が残つてゐる。日清、日露の戦争を経た佩刀である、が故人が此の軍刀は未だ曾て^{ちゆ}衄らざる軍刀であるといつて、平生に佩用せるものであるから、それを御納め致したいと仰せられました。私は流石にあの秋霜烈日の如き一面を有せらるる根津先生が、幾度となく兵馬の間に馳駆せられ、危難の間に入出せられたるに拘らず、至る所に仁民愛物の至情を留められたる事蹟を回想致し、且つかかる貴重なる御家宝の存することは、先生の御生涯を通じて、東洋永安の大経綸を定められる所以の大精神の現はれであることに感激し、誠に難有次第であると感謝しながら、辞して奈良に赴き、京都に還り即夜東京に向ひました。(後略)

東京に戻った山田委員長は、白岩理事長、大内院長に報告して、一同これを拝受する事に内定し、山田委員長は八月十三日に京都伏見桃山に根津先生夫人を再訪して、軍刀を拝受し、上海に捧持されて、靖巫神社に納められた。

ここで、靖巫神社の御神体あるいは御神宝と云われた物が示す靖巫神社に込められた精神に付いて、確りと認識をしておかなければならない事がある。

靖巫神社が三先覚ゆかりの三振りの刀を御神体(御神宝)とした意味は何なのだ

ろうか。

それは、根津山洲先生夫人・根津栄子刀自が敢て口に出し、その言葉に山田岳陽委員長が感激した所にある。山田委員長は「根津先生が、幾度となく兵馬の間を馳駆せられ」と語っているが、戦場におけるその苦難の状況は、「山洲根津先生傳」(昭和五年五月 東亜同文書院瀧友同窓会編)の54ページ以降に詳しく、苦難の後帰朝した先生が、明治陛下が広島ご進転の折に、名古屋停車場に於て特別に汽車の窓より拝謁を賜り、「是より朕に扈従して広島に到るべし」との勅諭を賜り、

「翌日広島大本営御前会議の席に於て龍顔に咫尺し、天の時、地の利、人の和に照し、詳らかに作戰意見を奏上せしに、終りに勅命により川上中将立会の上、陛下の机の直前に進み陛下の御案の上に地図を披き、図上にて説明を指畫奏上せり。此の奏上は甚だ長時間に亙り二時間以上を要せり。当時之れを根津大尉の長奏上と云ひ話柄に上りたり。」

と同書380ページに書かれている。

根津山洲先生は、一大尉の身で、明治陛下に直々に作戰を奏上する程の優れた参謀軍人であり、また、弾雨の中の戦場を馳駆する軍人でもあった。戦場で清国の兵士と顔を合わせた事もあったと思われる。

しかし、その根津先生が「自分の佩刀は未だ血塗(衄)られた事がない」事を誇りに思つて居られたと云う事の意味が大事である。栄子刀自から根津先生の佩刀に対するお気持ちを聞いた山田委員長は「仁民愛物の至情」と云い、「東洋永安の大経綸を定められる所以の大精神」であると感激して述べている。

「東洋永安の大経綸」こそが同文書院において学ばれるべきものであつて、この書

院に欣然として笈を負って集う若者の心底において受け継がれるべき精神が、根津先生がこの佩刀によって示された「仁民愛物の至情」なのである。

④「根津先生の佩刀」が靖国神社のご神宝とされた事の今日的意義

私がこの靖国神社のご神宝について、革めてその意義を深く感じたのは、昨年(2014年)ノーベル平和賞に日本国憲法の九条をノミネートしようとした日本人があった事を知って恥ずかしく感じたからであった。

昭和20年の敗戦後、聯合国の占領下、米軍の駐留下に制定された日本国憲法の制定経緯に付いては、これまで種々論じられて来た。だが今日、ネットであらゆる資料が検索できる状況の下では、占領下の日本政府に示された「マッカーサー・ノート」や「GHQ原案」などを検索できる。この資料を基にして、憲法の制定過程を考え直して、一般に膾炙している現憲法に対する理解を改めねばならない。

マッカーサーが日本政府に示した三原則の「第二原則」では、マッカーサーは日本に降りかかる火の粉を払う自衛の為の戦争をも禁じており、「日本はその防衛と保護を、今や世界を動かしつつある崇高な理想に委ねる」と書いて、米軍の占領に日本人は自らと国家の安全を委ねるべし。米軍の日本駐留が「崇高な理想」によるものであると強弁して、憲法にこの文言を入れさせる事によって、米軍の日本駐留を永久化しようとしていた事が判る。そして、このマッカーサーの意図が、憲法の前文に反映され、九条となって今日に至っている。日本人が世界に誇るべきものとして認識している九条は、実は、前文と対になって

おり、好戦性を持つ日本国民は、米軍にあらゆる武器を取上げられ、米軍の支配下に忍従していれば良いのだ、と云うアメリカ覇権主義の表現なのである。

日本に進駐して来た米軍は、恐る恐る上陸したに違いない。米進駐軍は、日本人から武器と云えるモノ総てを取上げる事から始めた。私は疎開先の田舎で、物置の隅に置き忘れられていた刃物、赤鯛でさえも取上げられた事を記憶している。このような進駐軍の恐怖心がマッカーサーの心にもあって、それがマッカーサー・ノートとなって、日本国憲法に反映されたのである。

日本国憲法は、今日一般的に認識されているように、平和を希求し、この地球上から暴力的・破壊的・覇権主義的・侵略主義的な戦争を排しようとする、高い理念の下に制定されたモノではない。正に敗戦国日本、それは軍備を持たせればまた世界に侵略戦争を行なうに違いない日本を力によって押さえ込んでしまおうとする、アメリカの覇権主義的意向の産物である。このアメリカ(聯合國)の意向を唯々として受け入れて、軍備を持たない事を決めている日本は、「私は夜中に寝惚けて、外へ飛び出して走り回り、ご近所に迷惑をかける癖がありますから、飛び出さないように身体を縛っておいて下さい」と云っているようなもので、日本人自身が、自らを好戦的であり、何時戦争を始めるか判らない困った性格だ、だらしの無い性格だと、世界に喧伝しているのが現行の日本国憲法の実態なのである。

このような経緯で制定された憲法を持っている事自体が恥であると私は感じているのであるが、その恥の凝縮された文言をノーベル平和賞にノミネートしよう

とする日本人の存在に、驚かされたのである。

このように、日本国憲法の恥ずかしさを知らない国民となってしまった日本人を「恥を知る国民」に戻すためには、「解釈改憲」を行ったり「現憲法の条文の書き換え」を行う位の事では駄目で、靖国神社の精神に基づいた憲法を、日本人の手で制定する事が必要なのである。

日本国の自主憲法は根津先生の「大学の道」を根底に置く憲法でなければならない。「仁民愛物の至情」にもとづいて血塗られざる軍刀を佩ぶる事を誇りとする国民である事を、憲法に盛り込まねばならないのである。根津先生の「大学の道」は日本国憲法を定める根本に無ければならないものであると同時に、それは明治維新の誤りをも正して行こうとするものである。それは荒尾精先生の日清戦争時の行動が示している。

この根津精神「大学の道」は、荒尾東方斎先生が、日清戦争に当って「対清弁妄」の序の中で、縷々述べておられるところに現れている。

いわゆる雄邦強國は嘗々汲々として、唯権謀術数はれ鬪い、唯吞噬攘奪是れ事とす。宇内を挙げて弱肉強食の野となし、民衆を駆りて狐狸豺狼の群となす。而して揚々として一世を呼号して、曰く是れ文華の国なりと。甚だしい哉泰西人の妄たるや。」

荒尾東方斎先生は「大学の道」ではなく、「皇道」と云うことばを使っている。そして、「皇道は至誠一貫の道」であると言いきっている。ところが荒尾先生の周辺にいる人たちが、日清戦争の優勢状況を見るや

否や、西欧の覇権主義、権謀術数に見習って、皇道を忘れてしまつて領土の獲得と多額の賠償金の獲得に夢中になっていた。荒尾先生はこの日本人の態度が許せなかった。日清戦争の最中、「対清弁妄」を出版して「皇道」に還る事を訴えた。

(注＝陸海軍軍人その他、多くは戦勝の余威に任せて、領土拡張や賠償金の多額の要求をすべきと主張するものであり、外交交渉の任に当たった陸奥宗光が辟易した様子が、「蹇蹇録」の445ページ(伯爵陸奥宗光遺稿・一九八六年九月第二刷発行・岩波書店)から書かれている。しかし、過大の要求が良くないと主張した者が無かった訳ではない。陸奥は谷子爵が伊藤総理に数千言の私書を送った事を述べている。他に勝海舟なども谷と同意見であった。しかし、それは私書に止まっていた、と述べて「万緑叢中紅一点の観なきに非ず」と書かれている。陸奥は「対清弁妄の序」には触れていない。荒尾先生が憤激はしても、それを読みやすい活字として表明しなかった理由は谷子爵の態度と共通するのではなからうか。日本は官民挙げて西欧覇道に毒され切つて狂奔していたのである。

満川亀太郎著「三国干涉以後」には

「明治二十八年の春から夏にかけて、毎日毎夜踊りの幾十隊、幾百隊、揃ひの踊衣に笛、鐘、太鼓、鬘をかぶつた仮装行列が、酔いしれた千鳥足で丸山公園に練りこむのであつた。『日本勝つた、日本勝つた、支那負けた。負けたら降参すりゃよいじゃ無いか。……』同書7ページとある。)

「然れども独り今の時事を議す者の四海に皇道を恢弘し以て天地の化育に賛する所以を思わざるを怪しむ。乃ち権謀術数を以て一方に覇業を立てんと欲す。噫、此の輩、豈に泰西の妄に惑い、吞噬攘奪を以て文華開明の真境なりと為す耶。」

この所は「小西郷」と云われた荒尾精先生の面目躍如である。西郷隆盛の征韓論と

云われるものは、至誠一貫、自らが乗り込んで韓国を説得しようとするものであって、護衛の為の兵士を伴う事も断っている。だがこの西郷の思いはビスマルクの影響を受けて帰国した岩倉や大久保などによって潰されてしまった。直ぐに江華島事件を起こす大久保などの明治政府は、明治維新の大義をビスマルクの権謀術数の程度のものに矮小化してしまっただのである。

西郷の心を知る荒尾先生は、この日本の姿に立腹されたのである。私は、靖亜神社創建の意義を知るためには、荒尾精先生の「対清弁妄」、特にその「序」を読んで頂きたいと思う。

そして、靖亜神社創建の精神こそは今日的意義を持つ、日本のあるべき姿を示しているのであって、それが現憲法を脱却して自主独立の憲法に還る、根本理念でなければならないのである。

あとがき

靖亜神社の意義を私のように受け止める事は、滬友会の方々にとっては、馴染めないと思われるかも知れない。しかし、私がこのような思いに達したのは、父子二代四十年に亙って靖亜神社の祭祀を続けて、年毎の例祭の意義を模索し続け、それを要路に問いかけて続けた結果である。そして、私は平成元年に

「東方齋荒尾精先生遺作復刻出版」

を作った。「対清弁妄」の序は漢文・荒尾先生の雄渾な達筆で書かれており、これまでその内容に触れた方は少なかつただろうと思う。私はこの文章を、多くの方々のご協力を得て読み下し文にして、荒尾先生の憤りに直に触れる事が出来た。それは明治維新の誤りの是正を強く求めるものであった。

(注・荒尾先生の「対清弁妄 序」を読むために、国会図書館の広瀬順皓氏のお力も借りている。大きな間違いは無いと思うが、後起の方々の御叱声を御願ひしたいと思う。)

靖亜神社にはこの荒尾先生の思いが根底にある。東亜同文書院にも然りである。東亜同文書院の衣鉢を継ぐ愛知大学の俊秀には、是非ともこの荒尾先生の気魄を感じ取り、それが根津山洲先生の「血塗られざる佩刀」なのである事を理解して頂きたいと思う。

〔付記〕

靖亜神社の創建に関わるその根本の精神を伝えるものとして、この稿では、「根津先生の佩刀」に留めようと思っていた。しかし、根津先生が「血塗られざる佩刀」に誇りを持たれた事は、そのまま、日清戦争時に荒尾先生が、周囲の議者たちの領土拡張の機会到来に浮かれている態度に、憤りを爆発させられた姿勢と裏表である。

今、日本では、中国の領土拡張への意欲の強さに辟易としつつも、一步誤れば中国に対抗する形で、日本もまた、領土拡張主義に走り兼ねない危険性を感じる昨今である。西欧の覇権主義に対抗する形で抬頭を図る中国に、西欧と同じ覇権主義から抜け出せぬままに対応しようとする日本は、明治維新が内包した過ちを再び繰り返そうとしているのである。荒尾先生の存在に触れざるを得なかった理由である。そしてそれは、「その初代院長には、近衛の主旨を体し、荒尾の遺志を継いだ根津が選ばれた」と書いた、田中香苗会長の、同文書院の歴史を見る、その目の鋭さを示すものでもある。

なお、靖亜神社のご神体（お鏡）は、山

田純三郎先生の手によって日本へ捧持されたと思う。そして、滬友会の事務所に保管されていた。ご神宝とされた三振りの刀は、引き揚げ時に、然るべき中国人の手に託されたと聞いているが、それを語った人が誰であるか、(本間先生であったかどうか) また、託された中国人が誰であるかは判っていない。

「靖亜神社先覚志士資料出版会」の名前で、私が出版した「東方斎荒尾精先生一遺作覆刻出版一」は、荒尾先生が出版された当時のままの姿を、多くの方に見て頂きたいとの思いから、当時の体裁を残すことを第一に心がけた。しかし、現在では明治時代の文章や活字は読み難く感じられるであろうとの考えから、これを現代の「カナづかい」などに改めて出版しようとして取りかかって下さる方が現れた。

「書肆^{しよししんすい}心水」の清藤洋氏である。

四月の後半には「荒尾精 日清戦争賠償異論 失われた興亜の実践理念 村上武解説」の書名で出版される予定である。是非多勢の方にご購読願いたいと、ご紹介お願いする次第である。

(平成 27 年 1 月 5 日)

村上武
元靖亜神社祭主
東光書院院長